

雜 報

會 員 動 靜

<p>岡山醫科大學助教授 中川小四郎</p> <p>岡山醫科大學助教授 關場代五郎</p> <p>陞叙高等官五等</p> <p style="text-align: center;">(三月一日)</p> <p>岡山醫科大學助教授 池上馨一</p> <p>岡山醫科大學助教授 大熊泰治</p> <p>在外研究中俸給百分ノ四十ヲ支給ス</p> <p style="text-align: center;">(三月二日)</p>	<p>金澤醫科大學教授正五位勳四等 泉 伍朗</p> <p>任岡山醫科大學教授</p> <p>叙高等官二等</p> <p style="text-align: center;">岡山醫科大學教授 泉 伍朗</p> <p>賜本俸四級俸</p> <p>職務俸金千九百圓下賜 (三月五日)</p> <p>臺灣總督府醫院醫長 森 滋太郎</p> <p>東京、福岡、岡山ノ各府縣下へ出張ヲ命ス (二月二十一日)</p>
--	--

○池上馨一、大熊泰治君 曩に學術研究の爲め歐米に在留を命ぜられたる兩君は本月十五日神戸出帆の鹿島丸にて出發せられたり

○宇都宮博章君 は豫て岡山醫科大學藥物學教室及び柿沼内科教室に於て研究中なりしが今般石川縣七尾町高島病院長として就任せられたり

○劉 雄君 は今般岡山醫科大學眼科教室を辭し九大醫學部眼科教室に勤務せられたり

○岩 藤 良知君 高知市日本赤十字社香川支部病院内科勤務

○土 岐 龍三君 岡山醫科大學柿沼内科教室勤務

○藤 間 靜君 一年志願兵として入營

○岡 村 好幸君 和歌山市日本赤十字社支部病院勤務

○生 山 昌敏君 岡山醫科大學稻田内科教室勤務

○河 合 忠義君 神戸市縣立神戸病院内科に勤務

○横 山 丈夫君 一年志願兵として入營

○村 上 立男君 岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室勤務

○鶴 山 義治君 岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室に勤務

○氏 家 貫三君 和歌山市日本赤十字社支部病院耳鼻咽喉科勤務

○上野勝太郎君 一年志願兵として入營

○日 下 連君 高松市日本赤十字社香川支部病院内科に勤務

○松 浦 三郎君 岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室に勤務

○松 村 光雅君 岡山醫科大學眼科教室に勤務

○牧 野 博君 松山市日本赤十字社支部病院に勤務

○正 岡 旭君 岡山醫科大學産科婦人科教室に勤務

- 藤原東一郎君 一年志願兵として入營
- 藤野源三君 岡山醫科大學藥物學教室に勤務
- 福本久君 和歌山市日本赤十字社支部病院外科に勤務
- 三谷登君 一年志願兵として入營
- 三木良定君 陸軍軍醫に就任
- 檜原律夫君 岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室に勤務
- 末岡悟君 岡山醫科大學津田外科教室に勤務
- 佐藤俱正君 曩日岡山醫科大學を辭し京都帝大醫學部眼科教室に於て研究中の同君は今般徳島市寺島町に於て開業せられたり
- 片木龍藏君 今般岡山醫科大學を辭し當市天瀬に於て開業せられたり

岡村剛次郎君 は大正八年岡山醫學專門學校を卒業し直ちに岡山縣病院に勤務し後廣島縣豊田郡中野村に於て開業し居られしが去二月別府地方に漫遊中流感に罹り遂に本月一日永眠せられたり洵に痛惜に堪へず謹みて茲に用意を表す

佐藤明君逝く 君は大正二年岡山醫學專門學校を卒業し最近には大阪市西成區玉出町本通に開業せられしが昨年來病を得て年末より大阪赤十字病院に入院加療中なりしが本月十日遂に同院に於て遠逝せられたりと茲に謹みて哀悼の意を表す

●泉伍朗君略歴 別項の如く今般岡山醫科大學教授に任ぜられたる泉伍朗君の略歴は左の如し

- 明治四十三年十一月京都帝國大學福岡醫科大學卒業
- 同年十二月同學助手ニ任セラル
- 大正六年四月九州帝國大學醫科大學講師ヲ囑託セラル
- 同年十二月同學助教授ニ任セラル
- 同七年八月外科學研究ノ爲滿二箇年間米英佛瑞へ留學ヲ命セラル
- 同八年十二月醫學博士ノ學位ヲ授與セラル
- 同十一年十一月金澤醫學專門學校教授ニ任セラル
- 同十二年四月金澤醫科大學教授兼金澤醫科大學附屬醫學專門部教授ニ任セラル
- 同十五年四月歐米各國へ出張ヲ命セラレ昭和二年一月歸朝今日ニ至ル

因に記す君は本月十八日着任せられたり

●學位授與 片木龍藏、増田宗義、松浦輔彦及び原勝巳の四君は論文を岡山醫科大學に提出し學位を請求し居られしが片木、増田の兩君は本年二月六日の教授會を通過し本月六日、松浦、原の兩君は本年二月二十日の教授會を通過し本月二十二日何れも醫學博士の學位を授與せられたり其主論文及び參考論文は次の如し

片 木 龍 藏 君

主 論 文

「デギタリス」族ノ骨格筋ニ於ケル攣縮作用ニ就キテ (邦文)

(昭和二年六月本會雜誌第三十九年第六號ニ掲載)

參 考 論 文

1. 「カムフル」ノ心臓作用ニ就キテ (邦文)
(大正十四年六月岡山醫學會雜誌第四二五號ニ掲載)
2. 「カムフル」ノ血管ニ對スル作用ニ就キテ (邦文)
(大正十五年七月本會雜誌第四三八號ニ掲載)
3. 「カムフル」ノ血壓ニ及ボス影響ニ就テ (邦文)
(昭和二年一月本會雜誌第四四四號ニ掲載)
4. 痙攣ヲ除外シテ觀察セル「モルフィン」族ノ毒性比較ニ就キテ (邦文)
(大正十五年十月本會雜誌第四四一號ニ掲載)
5. 「クラール」様作用ヲ有スル藥物ノ骨格筋ニ對スル作用ノ比較研究 (邦文)
(昭和二年二月本會雜誌第四四五號ニ掲載)
6. 骨格筋ニ於ケル「テトロドトキシソ」ノ作用ニ對スル二三興奮性藥物ノ影響ニ就キテ (邦文)
(昭和二年十一月本會雜誌第三十九年第一一號ニ掲載)
7. 骨格筋ノ電氣的刺戟效果ニ對スル「デギタリス」族ノ作用ニ就キテ (邦文)
(昭和二年十月本會雜誌第三十九年第一〇號ニ掲載)

增 田 宗 義 君

主 論 文

「クロナキシー」ノ研究

其 1. 麻酔神經ノ「クロナキシー」及ビ「クロナキシー」ニ對スル溫度ノ影響 (邦文)

(昭和二年十一月本會雜誌第三十九年第一一號ニ掲載)

其 2. 「クラール」ニテ中毒シタル筋肉及ビ其神經ノ「クロナキシー」ニ就テ (邦文)

(昭和二年十二月本會雜誌第三十九年第一二號ニ掲載)

其 3. エベツケ氏及ビリリー氏筋神經標品模型ノ「クロナキシー」ニ就テ (邦文)

(昭和三年一月本會雜誌第四〇年第一號ニ掲載)

參 考 論 文

1. 心臓筋肉ノ最大働作 (邦文)
(昭和三年二月本會雜誌第四〇年第二號ニ掲載)
2. 赤色血滲鹽方法ニヨル血色素酸素結合機轉ノ研究 (獨文)
(一九二五年獨逸生物學雜誌第一五六卷ニ掲載)

3. 温血屬ノ血液凝固形成機轉ニ關スル「ウルトラミクロスコープ」ノ觀察 (獨文)
(一九二五年ブリューゲル氏生理實験第二〇七卷ニ掲載)
4. 疾病ニヨル「ウルトラミクロスコープ」上ノ血液凝固像ノ變化 (獨文)
(一九二五年獨逸實驗病理及ビ藥理學雜誌第一〇五卷ニ掲載)
5. 嗅覺検査ニ就テ (獨文)
(昭和三年二月本會雜誌第四〇年第二號ニ掲載)

松 浦 輔 彦 君

主 論 文

- 酸性「フクシン」染色ニ就テ
特ニ結締織染色ノ學理的觀察 (邦文)
(昭和二年四月本會雜誌第三九年第四號ニ掲載)

参 考 論 文

1. 「カルミン」染色ニ就テ (邦文)
(昭和三年一月本會雜誌第四〇號第一號ニ掲載)
2. 「コンゴロー」ト染色ニ就テ (獨文)
彈力纖維ノ新染色法
(大正十四年六月フオリア・アナトシカ・ヤボカ第三卷ニ掲載)
3. 黴毒病原體「スピロヘーター・バリーダ」ノ簡單ナル檢出法ニ就テ (邦文)
(明治四十二年十一月中外醫事新報第七一一號ニ掲載)
4. 滲出液漏出液ノ臨牀的鑑別法ニ就テリバルタ氏反應 (邦文)
(明治四十二年四月中外醫事新報第六九八號ニ掲載)
5. 日本住血吸蟲ノ地理的播布ニ關スル智識増補 (邦文)
(明治四十三年九月本會雜誌第二四八號ニ掲載)

原 勝 巳 君

主 論 文

ウイダール氏食餌性白血球減少ノ本態的研究

- 其 1. ウイダール氏食餌性白血球減少ト肝臟疾患トノ關係ニ就テノ實驗的研究 (邦文)
- 其 2. 所謂食餌性白血球減少ト膽汁成分トノ關係ニ就テ (第 1 回報告) (邦文)
(昭和二年六月本會雜誌第三九年第六號ニ掲載)
- 其 3. 植物性神經ト白血球トノ關係ニ就テノ實驗的研究 (邦文)
(昭和二年十一月本會雜誌第三九年第一一號ニ掲載)
- 其 4. ロイコウイダール反應ト「アトロピン」トノ關係ニ就テ (邦文)

參考論文

1. 盜汗及び其蔗糖療法 (邦文)
(大正十一年五月治療及び處方第三年=掲載)
2. 副乳=就テ (邦文) (寛繁, 原勝巳共著)
(大正十一年近世醫學第九卷第八號=掲載)
3. 脚氣知見=關スル二三ノ追加 (邦文) (田川蟬太郎, 原勝巳, 大森精一共著)
(大正十三年八月本會雜誌=掲載)
4. 岡山地方=於ケル所謂流行性腦炎ノ血液像 (邦文)
(昭和二年五月本會雜誌=掲載)

●卒業生 今般の岡山醫科大學卒業生は左の如くにして本月二十四日卒業證書を授與したり

岩 藤 良 秋(岡 山)	岩 井 知 義(兵 庫)	原 田 要 一(岡 山)
橋 本 亨(熊 本)	林 孝 彦(廣 島)	濱 田 英 治 郎(岡 山)
董 道 善(支 那)	土 岐 龍 三(岡 山)	藤 間 靜(島 根)
趙 脩 願(支 那)	大 栗 清 實(德 島)	岡 村 好 幸(和 歌 山)
生 山 昌 敏(山 梨)	織 戸 亨(大 分)	河 合 忠 義(岡 山)
香 取 正 倫(千 葉)	鎌 倉 貢(廣 島)	横 山 丈 夫(鹿 兒 島)
立 花 岩 吉(岡 山)	田 中 敬 三(兵 庫)	土 屋 敏 正(兵 庫)
村 上 立 男(岡 山)	鷗 山 義 治(島 根)	氏 家 貫 三(東 京)
上 野 勝 太 郎(島 根)	栗 林 太 郎(大 分)	日 下 連(岡 山)
山 根 肇(岡 山)	松 波 賢 吾(岐 阜)	松 浦 三 郎(兵 庫)
松 村 光 雅(栃 木)	牧 野 博(岡 山)	正 岡 旭(兵 庫)
前 田 茂(兵 庫)	藤 原 東 一 郎(岡 山)	藤 野 源 三(愛 媛)
福 本 久(兵 庫)	福 井 元 之 輔(青 森)	古 田 壽 次(岡 山)
阿 久 澤 太 重(群 馬)	佐 藤 幹(島 根)	三 谷 登(岡 山)
三 木 良 定(兵 庫)	檜 垣 律 夫(廣 島)	森 田 一 雄(岡 山)
森 秀 齋(京 都)	末 岡 悟(山 口)	

●入學許可 今年の岡山醫科大學入學志望者は百十三名なるを以て其選抜試験を執行下記六十三名に入學を許可したり

岩 崎 武	岩 佐 鑛 藏	井 上 雄 吾	井 爪 昌 和	家 永 實
家 城 博 泉	板 野 坂 惠	今 屋 一 誠	石 島 達	伊 藤 正 道
服 部 三 樹	羽 田 謙 仁	橋 本 健	新 田 司 郎	大 西 晃
大 野 勤 次 郎	大 谷 憲 吉	岡 宏	岡 本 重 雄	岡 崎 哲
金 津 晴 亮	金 井 英 藏	金 光 近 夫	河 村 謙 一	河 野 通 郷
龜 井 俊 夫	嘉 悅 新 一	米 坂 彌	横 山 猛 重	田 邊 公 彬

田 中 剛	高 野 恵	伊 達 富 久	中 内 胤 雄	中 田 富 士 男
中 尾 親 章	鍋 島 清 志	内 藤 達 雄	内 橋 禮 次	久 保 四 郎
久 山 正 策	蔵 本 養 三	柳 田 秀 一	山 本 英 雄	安 田 健 次 郎
松 山 加 壽 雄	藤 田 敬 吉	藤 野 博 儀	福 田 正 男	福 井 朋 安
小 關 二 郎	小 坂 昭 男	江 口 重 郎	赤 木 章	英 賀 利 忠
木 屋 正 文	木 下 武 男	北 垣 忠 男	望 月 章 次	森 岡 清 三 郎
關 谷 重 幸	杉 本 徹	菅 沼 博		

● 佛國, 英國の旅 (下)

關 正 次

船は北獨逸ロイド會社のベルリン號で、いま、大西洋をニューヨークに向つて進んでゐる。かすかに船の機關の響きを感じながら「佛國, 英國の旅」の思出の續きを書いて行く。

九月二十日、ユニヴァーシティーカレッジの解剖學教室に行き、エリオット スミス氏を尋ねると、オランダの學會に行つて不在である。英國では組織學が普通生理學に附屬してゐることは前に書いたが、このカレッジは例外で、解剖學教室で教へることにしてある。その組織學と胎生學との教授はゼー ビー ヒル氏である。このカレッジになほ一人のヒル氏が居り、それは生理學のエー ヴィ ヒル氏である。

近衛兵のやうな服裝をした門番に案内せられ、エレヴエーターで昇つて、ゼー ビー ヒル氏のところに行く。「この教室によく仕事の出来るヒル嬢が居られると聞きましたが、あなたのご一門ですか」と問ふと「さうです」と云つたから、獨逸のメーレンドルフ教授の夫人が毎日教室で研究に従事し、今では助手の質問にも答へ、教授の論文の草稿も作ること、又助教授のベンニングホッフ氏の夫人も、講師のスパンナー氏の夫人も、同じやうに教室に来て切片を作つたり文獻を涉獵したりなどしてゐることを話したら、氏は特に熱心に聴く風に見えた。のちに一室の窓に近く一段高いところで切片を作つてゐた一人の女性をわざわざ戸口によんで「ヒル嬢です」とも何とも云はずに私に紹介したが、あれがきつとヒル嬢であつたにちがひない。教室のデモンストレイターのデーヴィス氏と雑談しながらヒル嬢のことを尋ねたら、ヒル教授の娘だつた。「およその年齢は」と問ふと「およそでも年齢を問ふのはよくない」と云ひつつ「三十前後だらう」と教へてくれた。ヒル嬢は理學士である。

ヒル氏に胎生學のモデルを多く見せて貰つた。室もすべて見た。氏のところで研究に従ふもの六名、學生は二年を合して百五十名、そのうち一五%は女性である。ヒル氏は謹嚴な人であつたが、私が謙謙を云ふのでよく笑つた。別れるときヒル氏に「他のカレッジの解剖學教室と教授の名とお教へしませうか、それにはあまり見るものはありませんけれど」と問はれたから、私はハイデルベルグでカリウス氏に云つた即席自作の格言「各教室はその特長を持つ」をここに持ち出して、カレッジ二つを教へて貰つた。それからヒル氏に伴はれて階下のスミス氏のところに行つた。スミス氏は前に云つたやうに不在で、デーヴィス氏といま一人につれられて各室を見て廻る。解剖實習室に十人あまりの男女の學生がゐたが、そのうちに一人の黒人の女性を認めた。屍體の前胸のあたりをしきりに檢べてゐた。英國にはインドやエジプトあたりから多くの學

生が来てゐるけれども、そのうちに醫學を修める女性が居らうとは思はなかつた。まことに意外であつた。この教室には四年ほど前から「レントゲン」線の装置を設け、管球も多く備へてゐる。建物は一九二三年米國ロツクフェラー財團の寄附によつて改築せられたと云ふから、「レントゲン」線装置もその機會に出來たのであらう。

このカレッヂの醫科全體に屬する圖書室を見せて貰ふ。解剖學に關する古い書籍が多く藏せられてある。珍しいものを見た。それは裏書きになつてゐる解剖の記録である。文字が悉く反對で、若し紙の裏から見たら正しいといふやうになつてゐる。今から五百年ばかりも前に解剖することが宗教か法律かによつて禁ぜられてゐたころ書かれたものである。親切な圖書室員が鍵を持つて來て金庫のやうなものの中に大切にしまつてある古い書籍まで出して見せてくれた。

ユニヴァーシティーカレッヂには二時間半もゐた。それからリーゼントパークに行けば、栗鼠が足もと近くまで飛んでくる。尾の運動がいかにも面白い。この公園の芝原に羊の群を見ると、ロンドンの市中にゐることを忘れてしまふ。動物園にも入つてみた。

九月二十一日。朝はセントバーソロミユスカレッヂにルグロークラーク氏を訪ふ。まだ若くて三十五歳ばかりと見えた。前にアフリカの食蟲類の一種を研究したが、いまは方向を轉じて關節内皮を生體染色によつて調べてゐる。「英國では動物を愛護して、むやみに動物を殺すことを法律で禁じてゐます。研究室で動物を殺すにも許可を受けねばなりません。動物に毒物を注射することも自由にはゆきません」と語る。「文明がよく進んでゐるんですね」と云へば、「進み過ぎてゐるんです」と氏は笑つた。英國では、犬を放ち飼ひにしてもよい。自動車などがこの放ち飼の犬を避けやうとして他と衝突したり人を傷けたりすることも稀でない。交通道路では犬は人と同じ權利を持つてゐると英國の人は云ふ。ロンドン塔で路に黒い鳥と思はれる鳥を二羽見た。人を恐れぬ。愛護すればこれほどまでに馴れるものかと感心して見てゐるうちに、通りかかつた七八歳の兒がちよつと手をあげて打つまねをした。すると鳥が怒つて兒に向つたから、兒は親の背後に逃げた。ルグロークラーク氏が見たなら、ここでも「文明が進み過ぎてゐるんです」と云つたであらう。

セントバーソロミユスカレッヂの解剖學教室は小さくて、古い。ロンドンの中央にあることから考へればそれがあたりまへである。解剖學教室にここでも黒人の學生をみとめた。組織學はやはり生理學に屬して居り、組織學實習室を見るためには道路を一つ超えて他の建物に行かねばならぬ。組織學の實習室は生理學のそれと兼用であつた。その下階の物理學講義室を覗けば、それは狭く、暗く、ひどく粗末であつた。

午後はセントトーマスカレッヂの解剖學教室にパーソンズ氏を尋ねた。英國解剖學會員の高眞三枚を示して、これがどこの誰、これがどこの誰、これがそのとき司會者であつた私だなどと教へてくれる。標本には一々その圖と詳しい説明とが附してある。「これが大に教授のための時を省きます」と氏は云ふ。氏の教授に熱心なことは、講義用の掲圖、「レントゲン」線高眞示説の装置等を見ればわかる。解剖病理の標本を陳列した大きな室にも入つて見た。

九月二十二日 朝は船會社に行つて米國に渡航する準備をした。好本教授がロンドンに居られることを人から聞いたが、地圖ではとところがよく分らぬ。「ホテルへ來て下さるか、或は出會ふ場所を示して下さい」と手紙を出したら、ホテルへ來て下さつた。いろいろロンドンの話を聽く。いつも純眞で少しの虚飾がなく、

人に對してはまことに親切な、よい先生である。夜はバリーから着いた某氏と三人で支那料理屋に行く。その某氏は多くの病院を視察して情景を活動寫眞に収めてゐる。

九月二十三日をロンドン滞在の最後の日として、午前は日本大使館へ行つたり、銀行へ行つたりする用務に追はれた。日本大使館ではリヨンのポリキヤル教授やその教室の某夫人等からの惜別の手紙を讀んだ。銀行で取つて來た米國貨幣のうち二十ドルの大きな金貨があつた。珍らしさにときどき出して眺める。午後、一人の友人が訪ねてくれたときにも、その金貨を出して見せた。英國の銀貨をこれに較べると、銀貨に全くねらちがない。指端に載せて軽く打つと、金貨は美しく長く響くけれども、銀貨の方はこれに著しく劣る。友人は「だから昔から鐘や鈴には金が多く加へられてゐるほどよいことになつてゐる」と云つた。友人は寺の子である。

九月二十四日、ロンドンを發し、一時間半の後にケムブリッジに着く。ケムブリッジもオクスフォードも人口六萬ほどの町で、どちらにも古い歴史を持つ二十ばかりのカレッジがあつてユエヴァーシティーを成す。そのカレッジの建物が何百年の時を経てゐるから黒ずんで着いた色を見せてゐる。ケムブリッジでいちばん大きいトリニティーカレッジの裏の芝生を通つて川に添ふ柳を眺めたときのよい景色は今も忘れぬ。このトリニティーカレッジにニュートンが學んだことがあるので、その大理石像が作つてあつた。圖書館には古い書籍が多く蔵せられてゐる。そのうちにミルトンの失樂園の第一版なども見られた。

九月二十五日は日曜日に當り、多くの運動場、ボート艇庫、博物館等を見て廻つた。ここのボート競漕は川幅が狭いために前後にならんで行ふので、それもなかなか面白いさうである。ケムブリッジ大學とオクスフォード大學との間の競漕はロンドンのテームス河で開かれ、ケムブリッジの方が最近連勝してゐる。

九月二十六日には先づ解剖學教室に行く。ウイルソン氏は三日前には教室に出たが今日はどうだか分らぬと云はれて、標本室を見たのち、再來を約して去り、生理學教室に赴く。ラングレー氏の死後をバークロフト氏が承けてゐる。しかし休暇中で氏はケムブリッジに居なかつた。組織學の主任のハーデイ氏もまた不在で會へなかつた。それでこの教室に三十八年間も居り、いまは専ら組織學の仕事をしてみると云ふ人に教室内を案内してもらつた。生理學實習室に波動描記器が六十臺も置いてあつた。この生理學教室で研究した日本人は二十人にあまるさうである。

解剖學教室に歸る。ウイルソン氏はまだ出てゐない。この教室に四十六年勤め、大戦中も「この者は教室に必要だから」と云ふ理由でここに止められた人に案内して貰ふ。ケムブリッジ大學の學生はすべてを合すると五千人と云ふ多數であるが、解剖學教室に來るのは二百人ばかり(?)である。それに一年に集る屍體の数が五十では少し不足であらう。解剖實習室は明るいやうにと最上の四階にあつた。

午後二時頃ケムブリッジを立ち、五時オクスフォードに着いた。今年は雨が毎日のやりに降り、こんなに悪い夏は四十八年目ださうである。それに此日は珍らしく終日晴天であつた。車窓から眺めると、野は耕作したところが少く、多くは牧場になつて居る。やはり樹が多い。

九月二十七日、アッシュモリアン博物館に美術を見て、解剖學教室に行く。トムソン氏は居ない。ここに來る學生は凡そ七十人、實習に用ふる屍が一學期に六體ばかり、設備も貧弱であつた。

轉じて生理學教室の組織學主任のカーレトン氏に刺を通ずる。核の形や組織培養などについて有益な研究をしてゐる人である。東洋の僧僧のやうな風貌をしてゐるなと思つてゐると、横に向いて机に片肘をつき

頬や頭のあたりを撫でまはしながら「シェーリントン氏は組織学の教授を私に委ねて少しも顧みてくれぬ。私は人に教授することをあまり好まぬのです。シェーリントン氏は六十五歳、教授が下手で、聞いてゐる學生も私も分らぬやうなことをよく云ふ。死んだケムブリッジのラングレー氏は何でもする人であつた」などと語る。大學博物館のことを問へば「格別のもが無いからつまりません。動物の尾が平生垂れて居るべき筈のものを上に向けたりなどしてあるのが私は嫌ひです」と棄てるやうに云ふ。研究室は器具などが埃に塗れてゐた。珍らしいことである、そこで二人ばかり切片を作る仕事をしてゐた。

大學博物館、圖書館等を見て、モードレンカレッジに行く。このカレッジには秩父宮殿下が學ばれた。今の英國皇太子もさうであつた。學生の大部分は大學内に起居する。その食堂に入ると、そこにゐた人が「プリンスチーフはここに坐られた」と教へてくれた。殿下の室は四番の二階と聞いて、そこに上ると、運よく大工が二人入口で仕事してゐたから頼んで室内を見せて貰ふ。すべて三室、カレッジではいちばんよい位置と思へた。いまはウエルドンと云ふ人に當てられてゐる。人の室だから、休暇中でなくてはかう詳しく見ることは出来なかつたであらう。大學の門を出るとき、門衛までがなつかしくなかつたから、あちらに向いて郵便物をしらべてゐたのを呼びかけて「プリンスの室まで見て来た」と云つたら、赤い顔を振りながら「ウエルダン、ウエルダン」と喜んでくれた。

大學のボート艇庫のあるところに行き、競漕用のボートを見た。競漕の練習をする川は、ケムブリッジよりオクスフォードの方がよい。

九月二十八日。オクスフォードから西南へ、汽車で三時間ばかりのバツスに移る。バツスは英國唯一の天然温泉場で、古くから保養地となつて居り、立ち並ぶ建築が面白い。殊に建築家ウッド父子と云ふのが多く造つたさうである。誰かが「バツスの家々は世界で最も美しい」と云つた。少し高い丘に登つて眺めると、なるほど美しい。

バツスの温泉を發見したのは昔歐洲に雄飛したローマ人だと傳へられ、大きなローマンバツスの跡が残つてゐる。地から湧く湯は温度華氏百二十度で、管に導かれて出るところでは百十四度。それを桃色の衣服に白帽子の女が汲んでは飲みます。次へ次へと弱い人が後押ししに車に乗つて飲みに来る。私も與へられた一杯を飲んでみた。

クイーンバツスと云ふので湯に入つた。いろいろ種類のあるうちで「深い浴」と云ふのを擇んだ。段を下つて、いちばん深いところに立つと水面は頭までくる。長く病床にある人は温室に育てられた花よりも野に咲いた花を喜び、一鉢の土の匂ひをなつかしんで嗅いでみる。いま、歐洲で窮屈な生活をつづけてゐる私はこの湯につかつてうれしかつた。それで身體を洗ふことはせず、何も忘れてただ湯の中を泳ぎまはつた。

九月二十九日は雨が降りつづいた。バツスに近いプリストルの大學に行つて来た。いままで私が訪うた英國の諸大學はみな古いけれども、プリストルの大學は一九〇九年に設立せられたもので新しい。大學の入口で遇つたエジプト人の學生に導かれ、先づ醫科の學長に會つたら、それが解剖学のフォーセット氏であつた。十年間に作つたと云ふ多くの口邊の發生モデルを示して丁寧に説明してくれる。講義室、實習室、それから立派な大學職員會議室や圖書室などにも連れられた。この新しい大學でも組織學は生理學に屬してゐる。その生理學の教授を電話で尋ねてくれたが、まだ出てゐなかつたので、それを待つ間とフォーセット氏は私を伴つて雨のはげしく降るなかをカッフエーを飲みながら町に出た。氏はクラカウであつたので開かれ

た前の国際醫學會で大澤氏を知つてゐた。大澤氏は亡くなつたと云つたら、意外らしい風に見えた。大戦が起らなかつたら次の国際醫學會は東京で開かれた筈と聞いた。それから獨逸醫學の話などをしてゐるうち、偶然同じところでカフエーを飲んでゐた濠洲メルボーンの解剖學教授の某氏に紹介せられた。

大學に歸り、學長室にバックマスター氏に迎へられて、その生理學教室に行く。氏は主にガス分析を行つてゐる。質朴で親切な人で、助教授らしい人と二人で各室を案内して説明してくれた。一室で實驗装置を見て、暫く考へてみたが「教室で行はれてゐることを私は知らぬ」と云つて笑つた。醫化學も分科してゐない。氏はむやみに分科することはいけないと力説した。純化學の實習室も見たが、机に臭氣を吸引する装置などもしてあり、これはよい實習室だなと思つた。「要は金です、金さへあれば出來ます」と氏は謙遜のつもりで云つたのだらう。私が教室を辭するときに「二三日滞在せられるとなほ精しくお見せするものもあるのですが」とほんとうにさらしい口振りであつた。いま想ひ出すが、氏は膝の出た古い粗末な洋服を着てゐた。一室が臭かつたので、それから後は始終鼻を鳴らして嗅ぐ風をしてゐたのがをかしかつた。

このブリストルには人口が四十萬近くある。一四九七年、カボット父子がアメリカの本土の發見に出帆したのはここである。大學に接して博物館が立つ。そこにその出帆の繪を見て、やがて米國に渡らうとする私にはよい記念であると思つたから、その繪の寫眞を買つた。又此博物館には立派な日本の鎧や兜や太刀などがよいところに置かれてあり、人はみな立ち止つて暫くこれを眺めてゐた。

九月三十日の朝は見物自動車でバスの内外を走り、晝からはやはり見物自動車に乗つて古い城跡や、美しい庭や、千年ばかり前の寺などを見て廻つた。

十月一日。汽車でバスを立ち三時間ののちにサウザムプトンに着いた。雨が降つてゐたけれども、町を見て歩いた。

十月二日。一萬六千噸のベルリン號に乗つた。室は二人宛であるが、私を遠慮したのか、私一人にこれを占めさせてゐる。乗客が少いのだからと問ふたら「いや他の室はみな満員です、あなたが仕合せなのです」と云つた。とんだことで仕合せを得た。船は佛國のシエルブルに寄り、そこで私の大きい荷物は無事に船に運び入れられた。

船客は殆ど全部獨逸のプレーメンから乗り、英國の人と違つて元氣に「ヤー、ヤー」と云ひながら大聲に話してゐる。私が一人ゐるとよく話しかけてくる。談話室に入つても、席を興へて何かと聽いてくる。私が獨逸語を話すのをいかにも喜ぶ風である。

私が佛國のリヨンを立つ數日前にボルチモアのジョンズホプキンス大學動物學教室の知人ルース氏から手紙を受取つた。ウツツホルの臨海研究所から出されて居り、研究所は大きくて、そこに二百人も働いてゐるなどと告げたのちに、「あなたをボルチモアの驛まで迎へに出る。あなたの入るべき家が定まるまでは大學の寄宿舎の私のところに客として居つてくれ」と書いてゐる。それで私は氏の云ふ通りにするつもりである。

ニューヨークの港頭の小さい島に自由の像と云ふのが立つて居る。これは佛國民の贈つたもので、希望と確信を抱いて米國に移住する人達が甲板に群集して近づく陸地を熱心に眺めてゐるありさまから印象を得て造られたものださうである。その自由の像を見る日は近い。十月十日の午後かな。

(以上 大西洋上にて)

●岡山醫學會通常會

本月分通常會は都合により流會せり尙ほ四月分通常會は同月十九日午後四時より開會の筈なり